



**NDコミュニティ** [本文へジャンプ](#)

[ [文字拡大](#) | [配色反転](#) | [初期](#) ] 本文はじまり

## [インタビュープレス](#)

キーパーソンインタビュー

《 [森 滋勝](#) [名古屋大学工学部名誉教授](#)

### 桂木健次 富山大学名誉教授

2012年5月27日

### 桂木健次 富山大学名誉教授 エコロジー（経済学）の深淵を透視する意志



桂木健次 氏写真

### 桂木 健次（カツラギ ケンジ）

Kenji Katsuragi

[富山大学名誉教授](#)

Prof. Emeritus - University of Toyama

研究分野 : 経済学 / 理論経済学 経済政策

1963年 九州大学卒業

委員歴：エントロピー学会世話人 北東アジア（環日本海）学会理事 経済教育学会代表幹事

受賞：計画行政学会中部支部奨励賞

2004年 富山大学定年退官

2009年 福岡工業大学定年退職

特定非営利活動法人河北潟湖沼研究所

著書（多数リンク）：<http://researchmap.jp/read0009544>

- ・環境経済学の研究
- ・環境と人間の経済学（共著）
- ・環境からの豊かさ計算
- ・社会環境学への招待 等

Q

激動の戦後を、政治・経済の専門家として、闘い。教鞭で社会改革を志向されて来られた桂木先生の登場です。まずはじめに、ありきたりの質問からですが、お生まれは九州ですか

A

満州です。大連 旅順で生まれました。昭和20年8月15日何かが起きて、いつもと違ってきたなという感じでした。

8月18日には、ソ連人が飛行機で来ましたね。私らは南方だったので意外とスムーズに行ったほうです。吉林省以北の人は、今の北朝鮮から半島を南下し船で日本でしたが、私らは大連から22年に帰国できました。父親はシベリア抑留捕虜となり、23年に日本に帰ってきました。

Q

ご卒業は九州でしたね

A

九州大学の政治学科です。一回り上の世代はレッドパージ、私らは60年安保の前後、共産主義ゴリゴリの先輩もたくさん居て、連日革命議論やらなんやら騒々しい時代でしたよ。

Q

60年安保は私らから見ると、ヘルメットも無しによくあんなに成れたなと思えたりしていました。60年 70年と安保は批准延長されたものの、60年では岸内閣の退陣と云う政治への一刀は入れられたという勝利感がいくらかあったように思えますが。

A

安保の頃は騒然としていました。九州大学にはマルクス・レーニン主義者はいましたし、彼らは社会主義革命を組織化する役回り、山村工作隊で炭鉱や山村に入ったり秘密武力隊をつくったりとヘタすれば命がけの世情でした。そうしたなか、共産党が主流の社会主義陣営は二段階革命（まず反米独立、そして人民革命）を唱えていたのだが、私らは、一直線の社会主義革命を追う共産主義者同盟（ブント）を、全学連という学生自治会の運動とは別に結成した。[\(1参照開く\)](#)

国会突入の頃は、政治権力を、完全に大衆運動の力で押すしかないという攻略でしたね。日本にとって前例の無いことで、ヘルメットとかもあまり考えになかったですね。

東大生の樺美智子がデモで死んでしまいましたが[\(2参照開く\)](#)、彼女のような心の深いところから支えていた女学生活動家も多く、“絶対、譲れない！”という感じで広がりました。

内閣打倒は果たしたものの敗北です。その後の革命戦線は、日本共産党も共産主義者同盟（ブント）も、それぞれ党派を作り闘いも割れていきました。ブント同志も、四分五裂し革命的共産主義同盟や社会主義青年同盟やブント残派（→第2次ブント）というように分化し、60年代中ごろ始まったベトナム戦争反対と大学管理法反対の闘いが続いて、60年代の終わりごろには、各大学に全共闘という大学紛争・70年安保につながっていきました。

“荒海を一人でも泳いで渡る！”という若者たちがたくさんいましたね。

私らの安保世代で言うと、大学卒後の選択があったわけで、一方、アメリカはブントで闘った部分のフ

ルブライト留学を工作して来ました。闘志姫岡（東大）等は敵前逃亡と称して海を渡り後年学者として大成しますね。

60年安保と同時に学生運動として創成された大学生協の全国連合会の学生常任理事をやっていた私にも声がかかったが、当時、地元福岡県知事は革新系が抑えて、その地方自治をつくり上げるのだという流れで地方公務員になりました。しかし、三池炭鉱での炭塵大爆発事故の始末に追われて身体を壊して退職し、数年遅れて経済系の大学院に進み助手になるわけです。

当時は、社会党系に政治的には身を置いていたのですが、大学紛争を経た頃から、ソ連共産党との関係をめぐる見解で割れて行き、私はソ連の経済体制、とりわけ分業の仕組みが経済合理的でなく、政治統治的「分業」になっていることに強く批判をもつようになって、このこともあり77年に北陸の大学に赴任した頃には、完全にマルクス・レーニン主義から離れていくことになりました。

Q

このころ、海外に何度も出かけられていますね

A

70年代終わりから80年代は、主にソ連・ハンガリー・ドイツ・フランス、80年代終わりごろから以後はソ連（ロシア）と中国が主です。その間、学界だけでなく、職業革命家から左翼学識者などともいろいろ交流させて頂きましたが、とくに衝撃的なのは、ハーマン・E・デイリー（[3参照開く](#)）というアメリカのエコロジー経済学者との出会い、彼からは、環境的な基盤の上に社会構造を作る「持続可能な経済学（エコロジー）」を必要とすることに気づかされました。

私の学生時代にソ連軍によるハンガリー弾圧事件があって社会主義における人権問題が大きなテーマになった時期があり、その後ソ連でもスターリンの死を受けてフルシチョフ柔軟な時代へと、またその反動のブレジネフの硬い時代へと変わり目の70年頃には、私は反社会主義分子とみられたこともありました。そして、そのハンガリーのブダペストで行われた国際経済史学会に参加する機会が1982年にあったのです。そこでは、議論の坩堝というかホテルとかでも議論したりしました。後のクリントン大統領の副大統領アルバート・アーノルド ゴアや、デイリーの門下生との出会いもその頃です。

また、国内的に地元の県庁や霞ヶ関や官庁にも先輩がいて、『お前まとめてくれ』ということで、省庁への出入もそれなりに本当のものを学びましたよ。

Q

波乱時節のキーパーマンであられたわけですね。九州であったことはどう影響しましたか

A

そうだね。九州のあの辺は男気というか、ヤクザの世界でも荒くれ者が多いところで。四方八方から睨む人物は数えたらきりが無い程でした。政府の者も、施策をなんとかしなきゃいかんが、自分で仕切れないからこちらを当てにしてくる。私は、睨まれるとかそういうことはお構いなしに、先輩や知人の残した資産を生かす気で、遠慮はしませんでした。というか、気にせずにはやらせて頂いたというか（笑）。

1980年代、なかでも竹下内閣の頃、世界における日本の在り方を環境資源・社会基盤・コミュニケーションにまたがって検討するプロジェクトがあって、88年には地球産業文化研究所という外郭が通産省に設置され、その地球フォーラム運営を任された経験は大きかったですね。企業の環境経営の基礎

(ISO14000)を出しました。政府も馬鹿じゃない。必要性はわかるんだけどね。解き方がわからない。

90年代では日本海で起こったロシアタンカー船ナホトカ号の油流出事故があって、たまたま私は流出油に漂着した北陸沿岸部に関する情報行政の官職にあった。その時も、どこにどのように油が来るか、予測も、影響もさっぱりわかっていないものの、シミュレーションに、SINETという情報網が役立った。いちいち文部大臣に上げる指示仰ぎを、私は官職裁量権行使し、政府と県と大学を結びました。政府は下手な事を云えないので、東京新聞が見開きでその結果を公示しました。

専門の話をしますが、環境経済学の教育研究の必要性が社会に広がり出したのは1980年半ばころかな。

実はアインシュタインより先に核反応からエネルギーの引き出しかたに同位体研究を通して気づき1921年にはノーベル化学賞を授賞しながらも兵器利用を避けるため研究成果を公開しなかったフレデリック・ソディというイギリスの学者がいたのです。

彼は、第2次世界大戦で広島・長崎と行使された核兵器の開発に取り組んだマンハッタン計画には参加することなく「戦争を必然とする経済体制」を編み変えるための研究にかかわりました。当時は世界的大恐慌といういまでいうデフレ経済、これをどうするかということでケインズの公共投資論や通貨管理体制の構築がまとまる時代、彼もそれなりの提言をするのだが、今で言う環境の事を考えずにエネルギー・経済は成り立たつはずはないということ(持続可能経済)のしっかりした認識を広めることを説くわけです。

今は、目先のことに心が行く学者が多くなったね。原子力とつけたら補助金が出るようなこと(原子力村)も実際あったりしてね。

Q

原発開発継続には、どのようなお考えをお持ちですか ご意見をお願いします

A

エネルギー・イノベーションをしっかりと再認識しないといけない。

これからは、自然エネルギー発電しかない。原子力利用の研究は必要ではあるが、原発推進で経済基盤を作る必要はない。海外では賛否両論の会議が長い間されてきたが、国内では一辺倒だった。そういった面も日本のおかしなところですよ。

この間、景気回復の原動産業でエコポイントを自動車につけてそれなりの成果をだしている。キャンペーンカーを買う人は、環境問題に敏感としたら、そこに学習や認識のステータスを付加するとか、消費者の意識を育てる販売を考えると、変化を作ることだってまだまだ出来ることがある。

私は現職時代長く自動車工業会と関ってきて、会誌に何本か書いていたし、トヨタのレジャーカー販売店での会報にもそうした記事掲載に協力したことがある。知っているところでは、ホンダあたりは早くから化石燃料の無い時代の研究をしていた。

Q

長い間大学教育に関われ、学生の変化はどのようにお考えですか

A

先駆者の信念を受け継げないというか、ペーパー学生が多くなっている気がします。

いろいろ出合い議論するということをもっとしないと、スケールの大きな青写真が思い描けない。その場その場のことも大事だが、大切なことを簡単に見失ってしまう。そういった、大切な事にピンと来なくな

るのは回避したいです。立場のこともあるが有識者の気概も弱くなったんだね。

Q

現況の政治面では、いかがな思いをお持ちでしょう

A

プライマリーバランスは厳しい。円高をブロックする。企業の海外流出、国内空洞化をブロックできていない。日本の余力はまだ200兆円ほどある。

今のうちに具体策を行うべきだが、財務省は、安全運転ばかり。乗り切る施策だという自信もないのでだろうが、また、霞が関の雰囲気、“当たり前”が変わる必要があるね。ピントのぼけたことを当たり前だと思い込んでるからね。

企業からは、円高とか空洞化は“やりだしたらやめられない。”という面がある（笑）。急速に進んでいるという原因を、日銀ももう少し自覚するべきだよ。また、マクロ経済レベルで、環境も考えざるを得ない時代です。

持続可能性の高い将来の経済的な基盤を考えられ、どのように国を促し、国民に賛同してもらえるような、しかもデンと肝っ玉の据わった人物が求められている。小手先の騙しでなんとなつてゆくような甘い時じゃない。

マスコミもしっかり考えないといけないですよ。マスコミも墮落してしまっている。

Q

私は、桂木先生に得体のしれない骨太なものを感じてまいりました。裏付けられた判断がそういったものになっている気がしてまいりました。

A

いやそんなたいしたもんじゃないですがね。

この歳までになると、“見えない物まで見えてくるんですよ。”

50年以上、政治・経済・環境を専門でやってきましたのでね（笑）。

大工職人が細かな図面見なくてもバッチリ作るあれですよ。

作られたきっかけを、受け継いだような気になっている者の気構えが変わらないと、本当の変化に出来ない。ものに出来ない。当たり障りないことしか言わない。激しい言葉で言えば孤立するから怖いという有識者。自身に、弱くなっているという自覚がない者が多い。

足を運べるうちは私も惜しまず云わせて頂きますから、老体ですが使ってみてください（笑）。

編集は桂川さんに任せますよ。ソコソコのことはうまく（爆笑）。

恐れ多いです、ありがとうございます。

先生には特有の存在感があります。聞いている者が安心できるんです。本物感じます。

今夜は、夜遅くまでありがとうございました。

#### 【取材後記】

具体名、事象名等かなり際どいため、私ども判断で抽象化し編集しました。読まれた皆さんが、桂木教授の思考のダイナミズムに触れ、何かを感じて頂ければ、これ以上に嬉しいことはありません。

実は取材は2度目で、今回は名古屋で独占取材させて頂きました。

桂木先生のFriedrich von Wieser (ウイーン大学) Bibliothek (現: 富山大学経済学部資料室に格納) と名古屋大学図書館の論文記録データ統合化がスムーズに進むことを祈念しております。

([JR名古屋駅セントラルタワーズ](#) [大かまど飯](#) [寅福店](#) 席協力にて)

Date: 2012 05 21 インタビュアー: 桂川

カテゴリー: [社会・福祉キーパーソン](#)

この投稿は 2012 年 5 月 27 日 日曜日 9:49 PM に [社会・福祉キーパーソン](#) カテゴリーに公開されました。この投稿へのコメントは [RSS 2.0](#) フィードで購読することができます。現在コメント、トラックバックともに受け付けておりません。

コメントは受け付けていません。

---

インタビュープレス is proudly powered by [XPressEUC Ver.0.31](#) (included [WordPress 2.7](#))

[投稿 \(RSS\)](#) と [コメント \(RSS\)](#)